
能力を消す少女

山田花子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

能力を消す少女

【Nコード】

N0556T

【作者名】

山田花子

【あらすじ】

超能力者は、存在する。だけでも、その存在を知られない為に能力を隠しているのだ。超能力者の大半は、能力が無くなって欲しいと思っているが、能力がなくなことは決してない。だけど、最近、超能力者達の中で超能力を無くさせる能力を持った超能力者がいるとの噂が流れた。pixivに投稿したものを改変して長編にしてみました。

ブローグ

テレビに稀に出てくる超能力者。あれは、テレビで作った偽物の超能力者だ。

本当の超能力者は、テレビで出て自分の超能力を見せない。日常的には使わない。

理由は、超能力者という事で好奇心目で見られたり、差別され怖がられると普通の生活が送れないからだ。今、超能力者は自分が超能力者という事を必死に隠して生活している。

皆は、普通の生活を望み超能力が無くなる日が来ることを望んでいる。でも、超能力という物はそう簡単には無くならない物だ。否、永遠に無くならない。無くなる日が来ることはない。実は、無くなつたという前例がない。

ただ、最近。超能力者の超能力を無くさせる能力があると聞いた。超能力者は、必死でその能力の持ち主を捜している。しかし、いくら捜しても見つからなかった。

「本当は、超能力を無くさせる能力を持つ超能力者はいないのではないか？」

「誰かが、流した嘘じゃないか？」

「ただ。九州に住む高田という超能力者は、無くなったと聞いたよ」
「もしかしたら、九州に住んでいるかもな」

だけど、九州に出向いても見つからなかった。やがて、無くさせる能力を持つ超能力者はいないと結論出して、捜すのをやめてしまった。

1話 告白されました

本日の天気は、晴天。雨の降る確率は、ゼロに近い気持ちいい晴れの日だった。私は、朝寝坊をしてしまい学校を遅刻してしまった。現在、廊下でバケツを持って立たされている。今の時代、バケツを持って廊下に立たされることはないと思っていた。しかし、私の担任はアニメオタクという社会的に偏見を持つ趣味を持っていた。そのお蔭で、アニメの世界みたいにバケツを持って、廊下を立たせてみたいという、くだらない理由だけで立たされてしまった。

でもすぐに、隣のクラスの松永先生に注意されてしまった。私は、教室に席に座り溜息をついた。大変な担任が来たな、と思った。本当なら、高橋という社会担当の先生が私のクラスの担任だった。

だけど、高橋先生は様々な事情でやめてしまった。一週間近く、副担任が仕切っていたが臨時の担任が昨日やってきた。最初の印象は、爽やかな先生だなと思っていたが、今の件でアニメオタクという欠点を持った顔がハンサムな先生と印象に変えた。

休み時間。私は、顔を伏せて寝る。理由は、単純に疲れていたからだ。

「…うか。悠佳！」

どこかで、私の名前を呼ぶ声がしている。しかし無視する。今は、寝ていたかった。

「東條悠佳さん！」

私の耳元叫ぶ。無視できなくなったため、顔を伏せながら受け答えをする。

「何？」

「隣のクラスの男子が呼びですよ」

隣のクラスには、知り合いがない。だから、私を呼んでいる理由がわからない。

「悠佳。今日は、何の日？」

「うん？ 七月七日。何の日でもない。ただの気持ちいい晴れの日で、夏にしては涼しい日だね」

「何言ってるの！ 七夕だよ！」

そういえば、七月七日は七夕だった気がする。私の家では、季節の行事はしない。だから、こういう行事がいつあるのかに結構疎い。「隣のクラスの男子が、悠佳に告白なのよ！」

告白。国語辞典では、隠していたことや本心などをありのままに打ち明けること。私は、恋愛で人に告白という行為がよく理解できない。それは、ただ私が恋愛出来ていないということ。つくづく思う。私は、つまらない女だと。

「わかった。わかった。とにかく、行くわ」

私は、廊下に出る。多分、ここでは告白しない。大体の確率で、体育館の裏。すぐに済まそうと思い、足早に体育館の裏に向かった。体育館の裏にいたのは、理数系が得意そうな眼鏡をかけた気が弱そうな男子だった。

「要件は、何？」

素気なく言い放つ。男子は、一瞬肩を震わす。だけど、決意したという表情で私を見る。

「俺の名前は。南秋夫。二年二組の男子です。入学式の時、東條悠佳さんを見たとき一目惚れました。付き合ってください！」

入学式のと時から、私を見ていた。何か気持ち悪い。それに、どうして私は告白される回数が人並み以上に多いのか不思議だ。容姿は、可愛いと思わない。性格も良いと思わない。優等生でもなければ、劣等生でもない。

よく分らない。人の好みは。

「ごめん。付き合えない」

「どうしてですか！？」

「えっ？」

「どうして、付き合えないんですか？ 悠佳さんは、好きな人がい

るわけでもない。フリーなのだから、付き合ってくれないんですか？ どうせ、いつか醒める恋です。一度ぐらい、誰かと付き合ってもいいんじゃないですか！？」

見かけによらず強気な南君。でも、私は付き合うとかそういうのはまだ早い気がしてならない。

「ごめん。南君。あなたの気持ちは、よく分かった。でも、そういうのって早いかな」って思っているの。仮に、南君。高校生になっても、好きだという気持ちがあったら……」

「だけど、俺は今。東條さんと付き合いたい！」

大抵の男子は、ここで諦める。だけど、南君はこれまでの男子とは違っていた。

「何で、ダメなんですか？ 理由が、あるんですか？ 人には言えない理由。秘密が！」

「ないけど。まあ、秘密はあるわね」

誰にも話してはいけない秘密がね。南君は、その言葉に驚いた様子だった。今のうちに、逃げようと思って私が去って行こうとしたときだった。

「まさか、だと思うけど。東條さんも、超能力者なの？」

その言葉に私の動きが止まった。全てが止まった。何も言い返せなかった。すぐに言い返せたら、誤魔化せはすなのに。全てが遅かった。今から、否定してもこの間が肯定していることを証明しているからだ。

「俺も、超能力者だ。安心して、誰にも言わない」

「……私も言わない」

そう返すしかなかった。いや、思いつかなかった。

「東條さんの超能力は何なの？ 俺は、水を操れる可笑しい能力だ」

「私は……」

答に詰まる。この超能力を知られたら、確実に利用される。でも、南君が自分から打ち明けてくれた。私が好きだから、だと思っけど。

その気持ちを尊重して、答えることにする。

「能力消去」

「能力消去？」

能力消去。文字通り、超能力を消去できる能力。超能力者が、超能力を無くなる日を作ることが出来る。ただ、あまり使いたくはない。体に大きく負担がかかって疲れる。実は、昨日の夜に超能力を消去したばかりで、続けてだと私の健康に支障が出てしまう。

「南君。ごめん。この超能力の意味は、またいつかということだ」

あとで冷静に考えれば、すぐにわかるはずだ。この超能力の能力を。実際に、今まで私の超能力について話した時、すぐにわからなくても、あとで考えればわかってしまい、超能力を消去させて欲しいと頼ってくる。

そして面倒な時は、嘘の超能力を言って誤魔化している。

私自身の超能力を、消去することは不可能。もしかしたら、神が永遠に超能力者の超能力を消去してると言っているのかも知れない。自己完結は良くない。だけど、こうも思わないと前向きには生きてられない。

「うさん。東條さん」

「は、はい」

「この問題は？」

「え、えつと…。わかりません」

「そうか。西野さん…」

まだ考えごとに浸かっていたかった。超能力について、それと南君についてのことも。だけど、考えごとに使っている暇はなかった。期末に出る範囲を、ノートに書き込まないといけなかった。

黒板を見ながら、ひたすらとノートに写す。とにかく、その繰り返し。そして、私たち超能力者は日常と非日常と行き来して、生きている。

出来れば、永遠に日常で暮らしていきたい。ただ、超能力者に関わ

ると非日常の世界へ行くことを意味している。出来れば、超能力を捨てて、超能力の記憶をけして、超能力者がいると知らない私になりたいと思っている。

でも、非日常な世界からそう簡単に離れない。一度関わると中々出てこれない。まるで、覚醒剤とか大麻をやっている人が辞めようと思っても、辞められないといった様に。

学校も終わり部活動に入っていないので家に帰った。私の部屋の畳の上で寝っ転がった。南君は、休み時間以来私のところへ来なくなった。もしかしたら、私の超能力について考えているのかも知れない。

当然のこと。私の超能力について考えない人はまずいない。それは今までの経験で確信している。

家のチャイムが鳴った。両親は、共働きの私は一人っ子だから、家の中には私一人だけ。

玄関のドアを開くと、そこには南君が立っていた。どうして、私の家を知っているのかは考えないでおこう。とにかく、南君は私を見て口を開いた。

「能力消去。ちよつと前に流行った、超能力を無くさせる能力を持つ超能力者だね。君は」

ちよつと前に流行ったというのは、微妙だが超能力を無くさせる能力を持つ超能力者であることには変わりはない。

「能力消去。お願いできるかな」

矢張りこの流れ。でも、南君には素直に応じよう。私は、家に上がらせて自分の部屋に通した。そして、南君を正座させた。実は、この正座は能力消去に関係がある。

「南君の超能力は？」

「え。水を操る能力だって」

私は、南君のことについて聞き始めた。まずは、名前に生年月日。そして、超能力の名前と詳細。最後に、自分の超能力を知った日。

「南君。目を閉じてて」

「あ、うん」

私は、南君の両肩を両手で触る。そして、念じる。私が、気を失ったら終わりだ。だけど、南君の超能力の力は、今まで最高に強かった。その為に、中々消去が出来なかった。

「…さん。東條さん！」

気がつくと、気絶していた。成功したみたいだ。

「無くなった？」

「それがもう。嘘みたいに！」

「良かった。これで、南君。諦めてくれる？」

「え、何が？」

「勿論。付き合うことよ。私のことは忘れて、さっさと他の女をみつけれ」

「やだ！」

南君は、私の言葉を遮った。

「俺は、東條さんと付き合う。だから、諦めない、この件とこの件は別だろ？」

確かにそうだ。超能力の件と、告白の件は別だ。

「俺は、諦めない」

南君は、そう言い残すと帰って行った。私は、超能力の使用で疲れたため寝ることにした。南君が、これからどう関わってくるのか楽しみだ。

2話 初めての親友と通知表 前編

昨日台風十号が上陸したことを忘れるぐらいに、雲一つない綺麗な蒼い空。つつい見入ってしまう。

明日から長い夏休みに入る。私は両親が共働きで、友達が少ない為に楽しい夏休みの計画がない。また、宿題を早く終わらせて二期の授業の予習をする休みになるのかと思った。

今まで、宿題は八月に入る前に終わっており、二期の授業の予習をしていた。盆休みは、父の実家に帰省する。それだけだ。

つまらない夏休みを、気がついたころには送っていた。一時期、同級生みたいに海や遊園地に行きたいと主張してみたが、『そんな娯楽施設に行く暇があったら、勉強しなさい』と言われた。両親は、東都大学出身のエリートで、勉強一筋で生きてきた人たちだ。勉強に関係ない娯楽は、必要ないと思っている。簡単に言えば、つまらない人達だ。かなりの現実主義者で、超能力とか幽霊の類は一切信じない。

私は、両親に頭の悪い子と評価してる。一年生の三学期の通知表を見せたら、成績が悪いと怒られてしまった。一年生の三学期の通知表は、国語四算数四社会五理科四英語三。普通に見ると、成績は良い方だが私の両親にとってこの成績は悪い方だ。何せ、両親共々通知表は全て五をもらって来ているからだ。

終業式が終わって、教室の掃除をする。そして、配布物のあとに通知表。通知表を配る時間が来ってしまった。通知表を出席番号順に配る。次々と呼ばれ始め、私の番になり通知表を受け取る。通知表を見ると、英語以外全て五だ。英語は四に上がった。

両親に勉強について五月蠅く言われない為に、頑張った甲斐があった。多少は、悪いと思われてしまうが。

学級委員が号令を掛け、一学期最後の「さようなら」を言う。私は、鞆を持って家路を急ぐ。今日は、珍しく両親が家にいる。仕事の出勤は、午後一時らしい。今の時刻は、午前十二時前。

成績について、長こういう事は出来ないはずだ。

だけど、こういうときに限って私に話しかける人物がいる。ちょうど、校門を出た時だった。

「あんた、どこの組？」

振り返ると、私より身長が高い女子がいた。多分一年生だろう。理由は、鞆がまだ新しく名前を書く場所に一年五組と書いてあるからだ。私はたまに一年生の女子から、一年生だと間違えられてタメ口で声を掛けられることがある。それは、身長が少しだけ低いのとあまり女子の間では目立っていないのが原因の筈だ。男子の間では、どんな理由か不明だが私をマークする人が多いらしく男子の間では結構有名みたい。

とにかく今は、急いでいるので適当にあしらう事にした。

「三組。じゃ」

それだけで、済まそうとしたけどこの一年女子はしつこかった。

「逃げるな。名前は？」

相手に名乗らせる前に、自分の名前を名乗ることを親は教えなかったのかな。

「相手に名乗らせる前に、自分の名前を名乗ることが礼儀だと知らないの？」

「…五組の高橋佳代」

「三組の東條悠佳」

「悠佳って、呼んでいい？」

年下に呼び捨てにされる趣味はない。唯、わざわざ二年生と言って、タメ口で話したことに後悔して謝ってすぐに逃げられるのはごめんだ。

「ねえ。悠佳は、どこ方面？」

「住宅街」

「偶然。一緒ね。」

佳代に付き合う事にした。確か一年三組の先生は、五十嵐先生だ。私が、一年生の時の担任の先生だった。一方、一年五組は新しく入ってきた数学担当の先生だ。だから、先生の話になると学年がばれてしまう。

「悠佳は、趣味は何？」

「えっと。読書かな」

「へー。じゃあ、歌手とか何が好き？ 私は嵐」

嵐。ジャニーズ事務所が出した、今絶頂中のアイドルグループ。うーん。B・zかな。他に、コブクロとかスキマスイッチとか。あとは、ポルノグラフィティとかBUMP OF CHICKEN。スピッツ」

両親はつまらない人達で、娯楽はくだらないと思っているが邦楽は聞いている。だけど、liveとかコンサートには行かせてくれない。矢張りつまらない人達だ。

「へー。バンド系が好きなの。ねえ、スピッツって……？」

私の年代でスピッツ知っている人は少数だ。

「親に聞いてみれば良いじゃない」

「……」

急に佳代は黙り込んでしまった。私は、理由は分からないが佳代の事情があるのだ。下手に聞かない方がいい。しばらく、沈黙が続いた。

その沈黙を破ったのは、佳代への嫌がらせだった。

「やーい。化け物！」

佳代の肩が震えた。そして、顔が真っ青になっていた。

「違うクラスの子と付き合っても、すぐ恐れられるに決まってる。化け物！」

佳代に向けて酷い言葉を言い放ったのは、男子生徒だ。多分同じクラスだろう。

「おい。お前、化け物とは付き合わない方がいいよ。良い事がないぞ！」

年下にお前と言われる趣味はない。私は、すぐに男子生徒の方へ向かって行った。女子を化け物呼ばわりして虐める。男の風上にも置けない。

「ねえ。貴方、一年生よね？」

「そうだけど。お前もだろ？」

「年下にお前と言われる趣味は、私にはないわ。女子を化け物呼ばわりして、虐めるなんて、男の風上にも置けないわ。最低ね。それとね、自分が言った言葉はいつか必ず返ってくるのよ！ やめた方がいいいわ」

「ふっ。どうせ、お前もあいつが超能力者だと知ったら、化け物呼ばわりするんだろ！」

「超能力者？ それが、どうしたの。何処が化け物？」

佳代が超能力者。それは驚きだ。何かかしの形で、クラスメイトにばれ、虐められてしまったみたいだ。

「…化け物だよ。十分に」

化け物と言う言葉が、私の胸にぐさりと刺さった。

「そう。貴方がそう思うなら、化け物かもね。仮に、自分が超能力者になったらどうするの？」

「ならねーよ」

「あらそう。超能力っていう物は、後天的に発生する場合もあるのよ。ならないと自分は思っているけど、いつかなくなってしまうときが来るかもしれないわ。その時、貴方が化け物と吐いた言葉が自分に返ってくるのよ？ 超能力者が化け物だとしても、かなり胸にぐさりと来るものよ」

「…うっ」

年下の男子生徒は、私の言葉に反論出来ないみたいだ。どうやら

私の怒りのオーラを感じ取ったみたいだ。

「でもね。世の中の三割の人間は、超能力者に占められてるのよ？
結構、この学校に超能力者いると聞くし」

嘘ではない。何故かこの学校は、妙に超能力を持つ人間が多い。
それぞれの学年の各クラスに三人はいると思う。それは、精神干涉^{テレパス}
を持つてゐる友達の草加智里が言っていた。智里は、私の能力は知っ
ている精神干涉^{テレパス}で知っていた。だけど、私の心情を知っているのか
消去して欲しいとは言つて来ない。

「それでも貴方は、世界の全体の三割の人間を化け物と呼ぶ？」
「…ちっ」

年下の男子生徒は、舌打ちすると逃げて行つた。私は、佳代の元
へ戻る。佳代は、驚いた顔をしてきて、言ってきた。

「私が、怖くないの？」

3話 初めての親友と通知表 後編

佳代は今に泣きそうな声で言ってきた。

「怖くない」

私自身も超能力を持っている。日常生活には使えない、仮に超能力者同士のバトルが合ったら、完全に負ける超能力。でも、超能力者の能力を完全に消去できる。超能力を無くして欲しい超能力者にしてみれば、救い同然の能力だ。

「佳代は、化け物じゃない。ちよつと、人と違っているだけで、あとは普通じゃない」

「でも。人と違ってするのが、超能力じゃない！ 貴方には、わからないわ。超能力者でもないのに。普通じゃないことが、どんなに辛いかな！」

「分かるわよ！ でも、私の場合は訳ありだから。佳代の辛さを理解できないかも」

「それ、どういうこと？」

「つまり。私も、佳代と同類ってことよ」

出来れば佳代の能力を消去したい。でも、その前に佳代の同意を得ないといけない。能力消去と言うのは、相手の同意を得ないと出来ないという法則がある。実際に、相手の同意を得ないと発動しなかったことがある。

「じゃあ、悠佳も超能力者なの？」

「そうよ」

佳代の顔が、次第に明るくなっていった。希望を見出したみたいだ。私の推測だが、佳代は今まで他の超能力者に会ったことはなく、超能力を隠しきれないで両親に恐れられて、同級生には虐められていた。先程の会話で、私が親に聞けばいいと言って佳代が黙り込んだのは、超能力者と言う事で親と何かあったのだ。それを思い出して、黙り込んだのだ。

「ねえ。悠佳は、どんな能力なの？」

私が超能力者だと分かると、能力について単刀直入に聞いて来た。
「佳代は？」

能力消去は、後に話す。まずは、佳代がどんな能力で苦勞してきたのか知れたかった。

「テレキネシス念動力。これのせいで、超能力者だという事を知られたも同然。
テレキネシ念動力は、扱いが苦勞するの。力が暴走して、知られてしまった。
こんな能力さえなければ…と、何度も思っただの」

割とメジャーな能力を持っているみたいね。説明されなくて、誰でも知っている筈の能力だ。テレキネシス念動力はスプーン曲げが、有名。スプーン曲げで有名になったユリ・ゲラーは、マジシャンで決して超能力者ではない。

それと、佳代は超能力が無くなればいいと思っている。私の能力が活躍する出番だと思う。

「佳代は、本当に超能力が無くなって欲しいと思うの？」

「そう…だけど」

「無くなった後に、後悔しない？」

「しないと思う」

「完全に無くなるのよ。あとから、超能力があった方が良かったとかは言わせないわ」

能力を消去したことに、後悔して私に戻して欲しいと懇願してきた人がいた。でも、私は能力を消去するだけで、復元させる能力は持っていない。

「ねえ、どういう意味、それって…」

「私の能力は、能力消去。どんな能力でも消去する。ただし超能力者限定」

私は小さな声で話した。あまり能力消去について聞かれたくない。それに、今は下校中でまだ生徒がちらちらという。あまり大きな声では、話したくない。

「もっと小さい声で、話そう」

「あ、うん」

佳代と手を繋いだ。佳代の手は、冷たかった。

「能力消去。私もして欲しい。後悔はしないよ。悠佳」

「そう。名前に生年月日と、超能力の名前と詳細。自分の能力を知った日を教えて頂戴」

能力を消去するには、相手に正座してもらわないといけない。それに、相手の両肩を両手で触らないといけない。だけど、一応私は能力消去を使いこなしてはいる。自信はないけど、応用は出来ると思う。

「高橋佳代。一九九八年八月一〇日生まれ。念動力。テレキネシス 物体を浮かしたり出来る能力。能力を知った日は、二〇〇四年の十二月二十二日だった気がする」

私は、目を閉じて念じる。佳代の能力の力は、あまり強くはなかった。だから、スムーズに消去出来た。それでも、私は気絶してしまった。

気がつくと、布団の上に寝ていた。誰かの部屋みたいだ。殺風景な部屋で、蜜柑の箱を机代わりにしているのか、蜜柑の箱の上には一年生の教科書が散乱していた。

「気がつきましたか。悠佳先輩」

「先輩……？」

いまいち状況が読みこめなかった。佳代の家で、ここは佳代の部屋だと言う事は分かった。でも、佳代には私が二年生だという事は言っていない。

「気絶してしまったので、私の家がすぐに近かったのだ、とにかく連れて来ました。家に電話をしようと思って、学生証に電話番号を書いてあると思ってみたら、二年三組と書いてあって。すみません。年上だと知らなくて……」

「…そつか。別にタメ口でいいよ」

先輩と言われるのに、あまり馴れていない。年下に呼び捨てされる趣味はないけど、佳代には呼び捨てにされてもいいかなと考えた。多分、佳代には友達がいらない。それで、超能力者だと知らない別のクラスの子に話しかけた。なるべく一人でいる子に。

「で、でも。悠佳先輩は二年生で」

「二年生だから、何だというの？ 年上に呼び捨てしてはいけないと、法律にでもあるの？」

佳代はかなり誠実な性格をしていた。私に声を掛けた時は、強気な性格を装っていたけど。

「そ、それはないけど」

「だから、呼び捨てにしてもいいのよ」

「でも…」

「私と佳代は、友達でしょ？」

「えっ…」

佳代は、訳が分からないという顔をした。

「だから、呼び捨てにしてもいいのよ。貴方は、私の親友よ」

「親友…」

まだ形だけの親友だけど、佳代となら本当の親友になれる気がする。

「佳代。ありがとう。気絶した私を運んでくれて。母さんたちが、心配するからもう帰るね。それと、いつでも二年三組に来て、私を呼んでいいわ」

佳代が持っていた私の学生証を返してもらい、玄関でローファアを履く。

「お邪魔しました」

鞆を肩に掛けると、家路を急ぐ。通知表を見せるために。佳代の家で、時間を確認すると午前十二時四十分だった。午後一時まではあと二十分だ。

案外、佳代の家から私の家は近かった。

「ただいま」

ローファアを脱ぎ散らす、両親に並べなさいと注意されるためきちんと並べた。リビングには、両親がテーブルの椅子に座っていた。

「通知表を見せなさい」

「はい」

両親の前では、敬語を使っている。タメ口を使うと、心が浮かれていると叱られる。通知表を、両親に渡した。まじまじと眺めている。

「前よりは、良くなったな」

「あとは、英語だね」

英語はかなり苦手だ。死ぬような努力をして、ここまで上げたのだ。それ以上は無理だと思う。一年生の一学期と二学期の通知表の英語は、どちらも二だった。これについて、両親に耳の欠陥が壊れるぐらいに怒られた。耳の欠陥が切れない為にも、英語を人何倍勉強したのだが両親はそこを評価してくれない。普通だったなら「良く頑張ったね」とか「無理は程ほどにしてね」言う筈だ。

「完璧を目指すように」

「はい」

完璧主義者だ。何事も完璧に終わらせないと気持ち悪くなる性格をしている両親だ。その間に生まれた私は、かなりの中途半端だ。私が最初に超能力を消去した人が、病気になったと知った。病気が治るように、千羽鶴を織ろうと思ったのだが百羽も織らないうちに飽きて終わってしまった。その人は、私の気持ちだけ受け取ったから十分だと言った。

その人は、今も病院に入院していて私は月に一回はお見舞いに行っている。

両親は、午後一時になると仕事へ行ってしまった。

行間1 奇術師の憂鬱

七月に入り、梅雨が終わった。私は、超能力倫理協会に向かう。表向きは、手品同好会とされている。その為、超能力倫理協会に属する超能力者は初歩的な手品は覚えている。

私は、手品師になりたいという夢があった。手品師になりたく、手品師に弟子入りしようと考えていた時。パソコンで検索に引っかけたのが、手品同好会だった。老若男女問わずで、私の家からも近かった。入会した。でも、すぐに手品のことで集まっている訳ではないと分かり、超能力のことで集まっていることと知った。

私は、運が良いことに超能力者だった。しかし、とても説明しづらく理解されにくい。日常では、絶対に使えない能力で、非日常でも滅多に使える機会がない。

持っただけの意味がない能力だった。持っていること自体が分かったのは、最近。手品同好会に入る前ぐらい。分かってても日常でも非日常でも、本当に使える機会がない。つまり一般人とあまり変わらない。だから、私も快く自分が超能力者だと素直に認めたかもしれない。

超能力倫理協会の交流会。全国から集まっている超能力者。集まる場所は、大手企業の社長杉本健一氏の豪邸だ。杉本氏は、持って生まれた超能力を利用して会社の成功させた。心や金に余裕出来た杉本氏は、他の超能力者と交流してみたかった。それで出来たのは、手品同好会と偽った超能力倫理協会だった。

さすがに大手企業の社長だけあって、豪邸のパーティー用の部屋は無駄に広い。皆さん、綺麗な格好をして交流している。私は、学校の部活が午前中にあり昼は学校の近くのアミレスで済ませて、そのままここに来たお蔭で、多少の汚れあり使いならされたセーラー服だった。私だけ浮いている気がして、早く帰ろうかと思った。でも、その場にいるだけ超能力者の面白い話が聞けて、帰るのも持

ってないと考えた。

「ちよつと前に流れた。能力を消す能力を持っている人は、本当にいるみたいよ」

「本当に？」

「確かな情報よ。私の友達の従妹の友達の妹の友達の姉の彼氏の妹が、実際に無くなったみたいよ」

物語によく見かけるセリフだ。

「まあ。簡単に言えば、その彼氏が私の元彼だったり」

「え、あんた彼氏いたの？」

「そんなに驚くことか？」

この女子二人は、若く見積もって十代後半。大きく見積もっても二十代後半。物語によく見かけるセリフを言った女性は、茶髪のセミロングで身長が百七十は軽く超える。一方で、相槌を打った女性はお団子ヘアで身長は百六十前後。

「でもね。妹さんに、会ったけど。本当に無くなったた。でも、誰が消したかなんて言わなかった。断固としてね。その人に、消させるのは負担がかかるのとのこと」

「へー。でも、そこまで情報あるのね」

「うん。それとね、妹さん病気でね。元彼とは、会わないけど。妹さんとはまだ付き合いがあって、お見舞いにたまに行くの」

「そうなの…」

「それでね。本題はここからなの。お見舞いに行った時。その初音…。妹の名前ね。初音と話していた時に、病室のドアが開いたの。同室の耳の遠いお婆さんの見舞いかなと私は思ったの。だって、セーラー服でどつからどう見ても、中学生ぐらいだもの。初音との接点見つからないもの。でも、その中学生はお婆さんじゃなくて、初音のお見舞いだったの」

どうやら能力を消す人物の噂は、噂では無くなっていた。気のせいか周りの人達が、セミロングの女性の人の話を聞くために、話声

が聞こえなくなってきた。

「で、その中学生。私を見つめて、こう言ってきたの。『超能力者？』って、私はそうだけど。と答えたのよ。中学生は、ああやっぱりかという表情をしたけど、すぐに表情は戻って初音と、少ない会話して帰っていったの。中学生は漢検の試験会場から近かったから、様子見に来たとのこと」

漢検の試験は、大体は五月の下旬から六月の月上旬に行われる。私は、勉強に関してはさっぱりで受けてはいないけど。

「それでね。初音に今の子誰？ と聞くとね。答えなかった。多分ね、その中学生が能力を消す能力を持っている子だと思うのよ」

私と変わらない年齢。能力も系列が一緒。会ってみたいと思った。「ねえ。じゃあ、セーラー服と言っても、どこの中学校よ。特定は難しいわよ。それに、年齢も分からないと」

「そうね」

セミロングの女性を私の方に振り向いた。人差し指で私を差した。

「この子のセーラー服と一緒にだったわ」

私は自分のセーラー服を見た。今日は初夏と言うのに、肌寒かった。なので、半袖ではなく長袖にしていた。

「ねえ。何処の中学校？」

教えてもいいのか分からない。話を聞くと、その中学生は能力を消すのに負担が掛かるという。教えてもいいのだろうか、と一瞬迷った。その中学生自身は、知られることを望んではないはずだ。その初音という人も、中学生に負担を掛けない為に黙り込んでいるのだ。

「た、多分。…違うと、思いますよ。私の地域は、ブレザーよりもセーラー服率が高くて、市内の中学校は七割がセーラー服です。ですから、私の中学校と限らないです」

嘘ではない。私の地域は、セーラー服率が高く、靴下の色で学校を見分ける。私の学校は、黒色の靴下で、隣の地区は白色。地元の

人ではないと、見分けがつかない。

「そつか…。残念。まあ、地道に捜すしか」

「あの…」

「えっ？」

「やめた方が良いと思います。その中学生。負担掛かるのでしょうか？ 消すのに。まだ青春も楽しんでいなくて、人生これからですよ。仮にその負担は、寿命が縮まるのだとしたらですよ。私たちは超能力を無くしたいと思っていますよね。苦勞してますし。ですけど、彼女は私たちの能力を消すことに寿命が縮まってしまう。超能力者は、この世に何人いると思いますか？ 世界の三割ですよ。億人ですよ。皆、消したいと思っていますじゃないですか。まず日本人の超能力者全員の能力を消す前に、疲れ果てて死んじゃいますよ？ 私たちは、殺人犯になりたいんですか？」

「でも…私たちは、人何倍も苦勞しているのよ。それぐらいは…」

「だからと言っても、違うと思いますよ。彼女の負担は、もしかしたら、私たちが想像もつかない物だと思います。それでも、消してもらいたいと言う方はそれでいいんじゃないですか。私は、その人を消してもらっても、差別します。自分の欲望だけに動いた化け物だと」

私にしてみれば良い事言っただけ。もうひと押し言って、捜すのをやめてもらおう。私は、勉強はさっぱりだけど、手品師になるには話術も上手くないとダメみたいで、話術について勉強していた。違う意味で、上達してしまったが。

「彼女は、貴方達の欲望の道具ではなく人間です。意思を持った人間ですよ。貴方達の道具じゃない。彼女だって、苦勞していると思いますよ。それも、能力のことで何倍も。私たちが、想像もつかないぐらいに苦勞していると思いますけど」

私が彼女の立場だったら、隠している。負担が掛かり、寿命が縮まる可能性だってある。だから、彼女の変わりに言ってみた。彼女の性格は分らないけど、この事について余計なお世話だと言いそうな気がする。

4話 失って初めて（前書き）

2011/06/20の改訂の際に、内容が大幅に変わっています。
この物語はフィクションであり、実在する個人、団体等とは一切関係
ございません。

4話 失って初めて

夏休みに入って三日が過ぎた。宿題は三分の一が終わった。今日の天気は、気持ちいいすがすがしい晴れだ。折角だから、何処かに出掛けよう。

私は、熱中症対策に麦わら帽子を被る。服装は、七分丈のジーンズに半袖のパーカー。腰まである長い髪は、お団子にして纏めている。今日は、すがすがしい晴れだが、気温がとても高く暑い。

小さなリュックにお財布とハンカチとティッシュを入れる。脱水症にならない為に、水筒に冷たいお茶を入れリュックにつめた。

家の鍵を閉めて、自転車に跨る。とりあえず、駅まで行ってみることにした。家から最寄りの駅まで、最低でも三十分は掛かる。歩きだとそれ以上だ。

夏らしく蝉の合唱が鳴り響く。まだそれ程五月蠅くはない。八月初旬から中旬に掛けてが一番五月蠅いと私は思っている。唯の推測だが。

駅に着いてから、出掛ける場所を考えることにした。たまには、計画性がないお出掛けも面白そうだ。いつもは、両親に計画を立ててから行動しなさいと言われる。でも、人生は計画がないから面白いのであって、お出掛けも計画立てないでふらふらしていたら、今まで目も向けなかった素晴らしいお店に行き着くかもしれない。それはそれで、結構楽しめる。

本当は駅まで、バスで行った方が速かった。でも、運動不足解消のために自転車をこいで駅に行く。一学期の体育の通知表の成績は、二だった。両親は、通知表の成績に五月蠅過ぎる程厳しいが、両親が厳しくする範囲は五教科だけだった。他はとやかく言わないから、私はまだ理性を失わずに生きているのだ。仮に体育や音楽などのその他の勉強も頑張りなさいと言われたら、今頃私は廃人となっている筈だ。唯でさえ、英語の成績が上がらないことで注意されて、私

では頑張っていた為に一時はうつ病になっていた程だ。

色々と考えているうちに、家から三十分掛かる駅前についた。駅前の自転車置き場に置いて、切符売り場に向かおうとしていた時だった。

美しいクラシックギターと共に、女性の人が歌い始めていた。一応は、気になったので歌い手を探してみた。耳を頼りに、歌声が大きくなる方へ向かう。人だかりが出来ていた。耳より目の方が早かったかもしれない。

『偶然出会った あの日忘れない

黒い大きな傘と君の紫色の唇

今では ただの思い出しにしかならなかった

君との約束守るまで 鎖は解けない

永遠に愛し続ける 死ぬまで君を…』

よくある恋愛をテーマにした歌だった。聞く価値もなさそうなので、私は切符売り場に戻った。でも、歌い手は私をちらつと睨みつけた。理由はわからない。けど、女の勘でここは歌い手さんの歌を聞いた方がトラブルに巻き込まれないと思った。何となくそう思った。

その前に路上ライブを行うことを、駅員さんと警察の人たちから許可取ったのかな。そう思っている考えている間に、恋愛をテーマにした歌は終わった。不思議な事に、人だかりは誰一人動かなかった。そこまで聞く価値のあるミュージシャンのかな。私にはよくわからない。

『あの日から 君は

私と会いたがらないね 私を嫌いになったのかな

教えて 今どこにいるの

君の携帯は 繋がらない

そうあの日から 春の日から…』

私は、ちらつと周りを見回した。警官が、路上ライブについて注意しに来たみたいだが、女性の歌に聞き入ったのか注意しに来なかった。どうしてかな。

『もう会えなくなつてから 何ヶ月
最近 君の噂を聞かなくなつた』

よく人ばかりを見ると、全員が女性の歌に聞き入る顔をしていた。そのことについて、私の頭にはてながついてしまった。そこまで聞き入る歌声ではなく、歌詞も新鮮味がなくベタな歌詞だ。

真相を知る為には、聞き入っている人に聞いてみる。近くにいた人ばかりを作っている原因の一人に聞いてみた。

「おじさん。今、路上ライブしているのって誰？」

「小崎メグ。自称シンガーソングライター」

おじさんは、それだけ言うとお崎メグというシンガーソングライターの歌に聞き入っていた。私は、小崎メグさんが弾き語るのを終わるまで見ることにした。

私が小崎メグさんの歌を最初に聞いてから、四曲目で終わった。人だかりは徐々に無くなっていた。警官も帰っていった。小崎メグさんは、ギターをケースに入れると私の方へ一直線にやって来た。

小崎メグさんは、私の顔に近づけながら言った。

「貴方。何者？」

「な、何者って…」

小崎メグさんの言葉に戸惑ってしまう。多分、誰でも戸惑う筈だ。いきなり、何者だと聞かれたら。

「だって、私の催眠ヒュプノスが聞かないからよ」

「ヒュ、ヒュプノス？」

「これが効かないのは、能力を無効化する能力者と自分自身が催眠ヒュプノス

系列の能力を持っている能力者だけよ!？」

意味が分かった。小崎メグさんは、ヒュプノスという能力を持っている超能力者で、その能力を効かないのが、能力を無効化する能力の持ち主と相手の能力者自身が小崎メグさんと同じ能力だけだ。それを深く考えれば超能力者関係なく、小崎メグさんの超能力に掛かることが分かる。

だから、私に何者だと聞いた。どう答えるべきか、私は考えた。私の予想だと小崎メグさんは能力を消去して欲しいとは思っていない。それだとしても、能力消去のことを言う必要はない。とにかく超能力者だという事実だけ答えてみよう。

能力消去は、能力を無効化する力はない。そのことを考えると、自分が小崎メグの能力に掛からなかった理由が分からなかった。

「能力者です」

「何の能力よ」

「そ、それは…」

無効化する能力だと言うべきか。悩んだ。無効化する能力は、私の能力消去と一緒に噂の能力でしかない。だけど、クラスメイトの草加智里が実際にいると断言していた。断言した理由は、不明だが、「ご、ごめんなさい。私自身も効かないことは、わからないです。無効化する能力と似ても似つかない能力なんですが…。ですから、見逃してください」

超能力者とはあまり関わりたくはない。それが、本心だ。

「あ、そう。ねえ、貴方。名前は…」

「その…知らない人に、名前を教えるはいけないと学校に言われているので」

中学校に上がって大人になった気分だが、扱いはまだまだ子供である。さすがに、中学っこうでは知らない人には名前を教えるはいけないと言うのは、不審者情報が出てきたというときぐらいだ。この年代に多い携帯のプロフィールに関しては、五月蠅く言うが。

「ただの小学生だと話し相手には、ならないわね…」

小学生と勘違いされてしまった。身長の所為だ。一応、これでも百五十センチ半ば。ここ一年で十センチ以上伸び、背の順で一番前だったのが一気に真ん中になった。この時の嬉しさは、言葉では表現できなかった。気がついたときは、背の順の一番前だった。小学五年生に上がった時の身長は、百三十七センチだった。体を細かつたために、四年生や三年生に学年間違われて苛められたこともあった。これはこれで、色々なことがあったが思いださないでおう。

「ち、違いますよ！ 中学生です！」

「えーこの身長で？」

「ちよつと、小崎メグさん。小学生は、失礼だと思うけどもつと小さいです」

「でも、君の言動がね。幼児っぽいから、身長がでかい小学生と思えちゃうのよ」

幼児っぽい。この言葉に、ショックを受けてしまった私がいた。

「まあ、それは置いといて。私の話に付き合ってくれない？ 中学生なら、適当に相槌打ってくれるでしょうから」

小学生が、大人に気を使わないとでも思っているのだろうか。それとも、大人に近くなった中学生はある程度の難しい話は理解できるからだろうか。どちらにしろ、今小崎メグさんの話し相手は私だ。正直、付き合いたくのも事実だ。初対面の人の話を聞くのは、あまり好きじゃない。

「着いてきて」

小崎メグさんは先を歩く。私も後を追う。自転車は、どうしようかと迷ったがとにかく今は小崎メグさんについていくことにした。

小崎メグさんが、連れてきた所は一軒家だった。一人は住むのは勿体ないぐらいの。メグさんは、家のカギを開けて、私を招き入れた。一階のリビングに、座らせられると小崎メグさんは麦茶とおつまみを持ってきた。

「ねえ。あんた、名前は」

「東條悠佳です」

「そう。じゃあ、悠佳。お前は、大切な人を失ったことがあるのか？」

「ない」

「そもそも大切な人がいなかった。これから心の底から大切だと思える人に出会えると思う。」

「当り前の返事だな」

「何処か小崎メグさんの言い方が、変わった気がする。ボーイッシュなイメージがある言い方に。」

「私は、失った。心の底から、大切だと思い愛した男性を」

「…そうですか」

「下手なことは、言えなかった。何で失ったのかも聞けなかった。」

「でね。それで、分かった。失って初めて。男性がどれ程、大切だったか…」

「しみりとした雰囲気になった。こういう雰囲気は、私はあまり好きじゃなかった。でも、今日だけは浸っていたかった。小崎メグさんの話を聞きたかったからだ。」

「結婚まで行きそうだった。でも、彼の両親が反対した。私は、売れないシンガーソングライター。仕事も大してない私を気に入らなかったみたいだった」

「よくある話だった。」

「私は、この能力を使って彼の両親に結婚を承諾させようとした。でも、彼はそのことを知り、激怒した。私と彼は、別れたの。それで…。その一週間後。事故に会って、死んだ…。彼の友達からあった」

「えっ…」

「皮肉なことに…。私の誕生日だったの。彼は、仲直りしようとした家に来ようとした時の事故だった。私は、ショックで…。いや。私の所為で、死んでしまったことになってしまつて。自分を責める毎日を送った。彼の葬式に出れなかった。彼の両親に顔を合わせられ

なかった！」

小崎メグさんは、後半から感情的になっていた。私は、本当に何も言えなかった。それは当然のことだった。小崎メグさんは、私より長く生きて人生経験している。それに比べたら私は、人生経験をしていない。小崎メグさんが言うような人生経験は。

「それで、私は自殺しようと思ったの。彼に償いたかった。でも、彼の両親がそのことを責めた。という経緯で私が自殺しようと考えているのを知ったのは知らない。ただ、彼の両親に。“償いたいのなら、息子の分も生きる”と言われたの。それから、考え直したの。彼の分も生きるって」

私は出された麦茶を一気飲みした。どこか気が緩んだ。それは、メグさんの話が終わったからだろう。

そのあと私は、駅に戻り渋谷方面に向かう電車に乗車して若者の町渋谷を目指した。

5話 草加智里との微妙な距離

小崎メグさんと別れ、若者の街渋谷を目指した。

が、池袋のファーストフード店で昼食を取っている最中に、草加智里と偶然出会ってしまった。

友達ではあるが、あまり関わりたくない相手でもある。智里も超能力者であり、精神干渉テレパスという人の心が読める能力の持ち主だった。当然、私の心は四六時中読めている訳で、嘘をついてもすぐに本当のことがわかってしまう。

そこまでは良いのだが、智里の場合は物凄く腹黒い。他人の思考を読み、自分に都合が悪いことだった場合、その人の精神を壊してしまうことがあるらしい。らしい、という表現を使ったのは事実が分からないからだだった。このことについて智里は、自ら言ったがすぐに嘘だと訂正した。智里の性格から考えると、しても可笑しくはなかった。それを聞いたその日から、智里に都合が悪いことを考えないようにしてきた。

だけど、協力的な部分もあり、超能力者の情報など教えてくれる。そのため、切っても切れない関係となっている。

「小崎メグ…思いたせないですね。まあ、催眠ヒプノスの使い手ということが分かったいいです」

現在、智里は私の思考を読み先程の小崎メグさんについて聞いてきた。私は、超能力者について詳しい智里ならどういう人物か聞いた。しかし、知らないみたいだった。

「超能力倫理協会に、入会している超能力者ではないことは確かです」

「そっか…」

超能力倫理協会。表向きは手品同好会で、超能力者たちが集まる会だ。私は能力消去の件で、入ってはいないが智里は入っていて、

超能力者のことなどそこから仕入れている。

智里は、誰に対しても敬語を使う。その敬語が余計に、智里の腹黒さを際立たせる。

「それより…大変です。今まで、言うのを忘れてしまいました」

大変なことなら、忘れてはいけないでしょ。という私のツツコミを無視して智里は言ってくる。

「協会のメンバーに、能力消去の存在が証明されました！」

「えっ!？」

その言葉に私は固まってしまった。言葉の意味を理解するまで、一分弱は要した。

「そ、それじゃあ…」

「実は、女性の人が。茶髪のセミロングの女性が、初音という女性に見舞いに行つて…」

その言葉で私はすぐに把握した。初音という女性は、私が能力消去を最初に使った能力者。今現在は病気になっており、月に一回は見舞いに行く。

茶髪のセミロングの女性には確かに会った。六月上旬に漢字検定があり、たまたま初音さんの病院が試験会場から近かったためお見舞いに行ったのだ。そこで、茶髪のセミロングの女性が初音さんのお見舞いをしていた。その女性に超能力者だと問いかけると、頷いた。すぐに私は、初音さんと少ない会話をして試験会場に向かった。能力消去の少女だと悟られたくはなかった。

「把握はした。つまり、どういうこと？」

智里が証明された経緯を無視して聞いた。

「簡潔にお願いします」

「つまり茶髪セミロングの女性が、女性と話していました。皆その話で聞き耳立ててました。途中、私らと同じ中学の女生徒と絡み、悠佳のことを底いました。そのあと、何やかんやで能力消去の存在を認められました」

簡潔すぎる。まるで何が起こったのが分からない。とにかく、能力消去の存在が認められたことに変わりがない。

「だから、気を付けてくださいね」

「な、何が!？」

「あなたのことを皆さん。血眼で探しております。セーラー服の少女だけ、掴んでおります」

智里が私に注意を投げかけてくる。私は、ファーストフード店で注文した品物を食べ終わった。ごみを捨てる場所に向かうことにした。

「まあ、貴重な情報ありがとうございました」

丁寧に智里に挨拶を言う。

「じゃあね。智里。九月一日にまた会おう」

「え、待ってください。夏休みに会いませんか？」

「じゃあね」

私の言葉に意外だったのが、智里が啞然とした表情で私を見つめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0556t/>

能力を消す少女

2011年6月20日19時25分発行